
アンダードッグ・ロッカーズ

早苗月 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンダードッグ・ロッカーズ

【Nコード】

N3782M

【作者名】

早苗月 槐

【あらすじ】

何かに負けた者達。

ロツクはそんな人を裏切らない。
忘れるな。

ロツクの熱さを、輝きを。

大人達よ、満足するな。

今立つ時だ。

ギターを手にしろ。

ベースをかき鳴らせ。

ドラムよ響け。

声を張り上げる。

今から始まる物語。

負け犬達の遠吠えと、笑うなら笑え。

そんな奴は捨てておけ。

我等による我等の為のロック。

名を刻みつける。

U n d e r d o g r o c k e r s !

天国への階段

普通に高校を卒業して、普通の大学を出て、普通に就職をして、普通にサラリーマンをしている。

青春をどっかに置き忘れ、情熱をかけた物を捨て、俺は普通を手に入れた。

安定した生活、やりがいのある仕事。

でも満足出来てないのは確かだ。

何かが足りない。

渇きにも似たそれを感じながら。

だからだろう。

ブルースプリングなんて言う馬鹿馬鹿しい名前のライブやロックを聞かせるバーに入ったのは。

木製の重いドアを開けて店内に入ると、簡単なステージとカウンター流れている曲は、ブルース・スプリングステーションの“ボーン・トゥ・ラン”。後から店名について聞いたら、そもそも彼の名前をもじって付けた名前だったらしい。

「いらっしやい」

落ち着いた声でマスターが言う。

白いワイシャツに赤いチョッキと少し古い感じのファッションだが、落ち着いた店内の雰囲気によく似合っていた。

仕事の失敗でむしゃむしゃしていたので、強い酒をやりたいた言くと、天国への階段を勧められる。

馬鹿みたいに強いカクテルだ。

「今日はライブないの？」

一口啜って眉を顰めながら尋ねる。

「ないですよ、日によってはお客さんに置いてるギター使って勝手にやっってもらってるんですが」

ほら、その。

そう言つてマスターの指を指す先にはブロンコのカラーをしたテレキヤスとスリートーンサンバーストのプレベ。

「使つても？」

「ええ」

思いがけず、久々にギターを触る機会に興奮するのを感じる。

テレキヤスを抱えて、椅子に座る。

ネックに指を這わせれば背筋に甘い痺れが走る。

店内にはちらほらと客が入っている。

適当にピックを取つて、かき鳴らす。

どうやらチューニングはずれていない。

一音、一音大事に爪弾く。

“天国への階段”

レッドツエツペリンの名曲だ。

このイントロを弾くために、タブ譜と向き合つたあの日々が懐かしい。

いつの間にかその上に歌が重なっている。

横を見れば、まだ若い女性が澄んだ声で歌っている。

長い黒髪。

ぱつちりとした瞳。

こつちを見ると少し笑つた。

客は何事だ、とこつちを向く。

何人かは“やつてるな”って顔。

ここまで来たらやるしかない。

久しぶりにロック魂が疼く。

ボーカルの女性は客を既に向いている。

俺も負けじとストラップを肩に通して客に向かう。

久々に味わう一体感。

こうなれば黙つてられないのがロッカーの宿命。

一段一段上つていくきらきらとした歌は、遂に二人では越えられない段差へと当たる。

すると一人の若い男性がステージに駆け上がり、スティックを持つ。

刻まれる正確なビート。

更には一人の女性がステージをよじ登ってくる。

ボーカルの女性の知り合いらしく、軽く抱き合った後にベースを担いだ。

そして二人では越えられない段差は飛び越えられ、また一段階段は上られていく。

俺は後悔していた。

エフェクターが欲しい！

少だけ音の薄さを感じながら、胸が詰まるような感覚を味わっていた。

歌よ終わらないでくれ。

天国への階段を選んだ自分を褒めなくなる瞬間。

長いのだ。

この曲は。

一歩一歩四人は上り詰めていく。

天国はもうすぐそこ。

ボーカルの高らかなシャウトに合わせてギターをかき鳴らす。

ベースが唸る。

ドラムが弾ける。

一瞬の静寂。

歌を締めくくるボーカルの寂しげな声。

バーに沈黙が訪れる。

そして拍手。

多くは無い人。

広いバー。

演奏の余韻に浸り。

不覚にも頬を一筋、涙が伝った。

“そうだ、バンドをやるう”

U
n
d
e
r

d
o
g

r
o
c
k
e
r
s

s
t
a
r
t
i
n
g
.....!!

天国への階段：スーツ編

「バンドを組まないか？」

あのバーでのライブの後、俺は真っ先にそう言った。

そうなければいいな、という楽観的な言葉だったけど、今の一瞬を分かち合った奴らなら、頷くという確信がどこかにあった。

「うん、いいよ」

簡単な言葉だが、間髪入れずに答えを返してくれたのはボーカルの女性。

なんかこう、夜のお仕事って感じのひらひらした服を着ている。

「私も！」

その言葉に反応したかのように思いっきり手を挙げたのはベースの女性。

ボブっぽく清潔に切りそろえられた黒髪にスーツ。

それだけ書くと真面目そうなのだが、これがどっこい底抜けに明るい。

っていうか、幼い。

「じゃあ、俺もやるしかないだろ」

そう言ったのはドラムの男性。

タンクトップから生える齷つい腕、日焼けした顔がいかにも肉体労働系。

ついでに脇からはみ出た脇毛がセクシー。

ていうか、整えろよ、脇毛。

こうして俺らのバンドは結成したのだ。

と、ここで締められたら綺麗な話なんだけど。

その後バンド結成祝いだと、マスターからのサービドリンクで乾杯したのだ。

よりによって天国への階段。

前述した通り、馬鹿強いのだ。

んで、ベースの娘が

「ぶっ」

と一気に口に入れた途端に吹き出して。

俺のスーツはこんな様。

と、着の身着のまま寝てた俺は、安アパートの一室で惨めにも思
い出していたのだった。

あーあ、金曜で良かった。

そして俺の一張羅は馬鹿強い酒の所為で色落ちが激しく、天に召
されたのです。

南無。

サンダーバード・ヒルズ

「うっは、ひっさしぶりに飲んだ飲んだ」

そう言っただけの煎餅布団に寝転がって伸びをしているのはベースのミナ。

当然ここは俺の部屋。

「ガミくんの布団煎餅具合がいいねえ」

煎餅言っな。

俺も煎餅言ってるけど。

因みにガミくんとは俺の事。

名前が上がってるのとガミガミ言っかららしい。

「ガミくん臭がするよ」

どんな臭いだよ、と思いつつ、ウブって歳でも無いのにドキッと
する。

さて、どうしてこうなったのかと逃避気味に考えた。

サンダーバード・ヒルズ 2

とりあえずスタジオで合わせようと皆のスケジュールを聞いて日程を決める。

これが社会人の難しい所、土日が休みじゃない職場なんてザラなのだ。

それでも何とか空きを作り、無理矢理に定時退社して課長に追いかけれながらこうして無事にスタジオの待合室に居る。

着の身着のまま、押し入れから取り出してきたストラトだけ持っ
て。

そうして煙草を吸っているとベースが最初に着く。

「ばんわー」

「よーっす、ミナだっけ？」

そうそう、とミナは笑って頷く。

「ギター何使ってるの？」

席に着くなり尋ねるミナ。

「学生時代買ったストラト」

やっぱり、初期衝動的な青春ロックはストラトだと思つのは俺だけ
だろうか？

「シングルコイルかー、うんうん」

ミナは嬉しそう。

「やっぱりギターはシングルコイルだよね」

うんうん、と頷くミナ。

「そういうミナのベースは？」

と言いつつ既に検討がついている。

あのケースはほぼ間違いない。

「ギブソン、サンダーバード」

ギブソンのサンダーバードは変形ベースの代名詞的存在で、その
独特なシェイプから例えばスラップ奏法等には対応していない。

二つ備えたハムバッキングピックアップからはロックらしい低音が飛び出す、フェンダー系のベースに対しなかなかじゃじゃ馬的な印象は拭えない。

「かっけえな、なんでまたそんなベースを」

「ベースって低音楽器じゃん？」

まあ、そうだな。と頷く。

「私、ベースの低音が好きでさ、スラップはどうも好きになれないんだよねー」

頭の後ろで腕を組み、椅子を傾けるミナ。

「何か低音薄くなる気がしてさ」

派手だけどギターと音域被るし。

そう言っただけだと椅子を揺らす。

やっぱり、ベースらしい考えだと思っ。

結構ベースは言わないだけで自分自身の考えを強く持っていたりするのだ。

そうこうしていると、ボーカルが着く。

「ごっめん、待った？」

両手を合わせ首を傾げる。

時計を見ればまだスタジオ入り二十分前。

「全然。俺らが早すぎただけだよ」

「そうそ」

ありがとう、とボーカルも椅子に座る。

「マイク、持ってきてちゃった」

そう言って笑うボーカル。

名前はリンで通しているらしい。

場末のスナックでシャンソンを歌っているとの事で、うちのバンド唯一のプロ。

「どんなん？」

問い掛けてみればニヤリと笑うリン。

「ガイコツマイク」

高校時代のクラブで使っていたものらしい。

シールの後とかで中々に年季が入って見える。

「やっぱ、ロックしたいよね」

歌を仕事に出来れば良い、と割り切ったつもりでもやはり何かしらの葛藤はあるらしい。

「おくれやした、すみません」

そうこうしてる内にドラムが来る。

たしかケンタ、今は土木の仕事をしてるらしく、作業服で頭にタオルを巻いたままの登場。

「着替え間に合わなくて」

そう恥ずかしげに言う。

「いいじゃん、労働者階級って感じで」

冗談混じりに言うのと申し訳なさそうに笑った。

*

早速スタジオに入る。

「んじゃ、まず合わせてみようか」

曲はカモン・エブリバディ。

アレンジしやすく、清々しく簡単なナンバー。

セッションするには最適。

なんだけど……

「走んなベース！」

「うっさい、合わせてよギター！」

「フィルが多すぎて気持ち悪いんだよ！」

ミナのベースは確かに巧い。

技巧的には正直適わないが、合わせる意識が欠けている。

よく聴るベースとか言うが、そもそもベースはドラムと共にリズム楽器だ。

そのドラムと言えば。

「気持ち悪い、機械かお前は！」

「そっちが走ってんでしょうが！」

「色気がねえよ！」

余りにも正確なリズムキープ故に逆にバンドサウンドから浮いているのだ。

凄い事だが、フィルも無く、淡々と叩かれても面白くない。

「私は？」

「色っぽ過ぎんだよ、楽しそうに歌いやがれボーカル！」

悪いことじゃ無いと言えばそうだが、何かねっとりし過ぎてキモイ。

そんな事言いつつも全員手は止まらない。

何だかんだ楽しんでいるのだ。

正直、皆レベルが高い。

だからこそもっと上を見たい。

口も悪くなるうと言つもんだ。

*

「お疲れさん」

練習を終えて、居酒屋に入る。

皆がビールを持って、ジョッキを合わせる。

「ぶっは〜、疲れた」

豪快にビールを飲み干してミナが伸びをする。

「みんな、ほんとお疲れ」

少しビールに口を付けたリンが言う。

「明日も仕事だろ、皆」

全員が陰鬱そうに頷く。

「安い賃金でこき使われて」

負け犬だよな、と皆俯く。

「んで、このバンドの目標何にするー？」

居酒屋に入った主の目的はその話し合いだったりする。

「勿論、オリジナルを含めてライブ」

正直、それ以外無いと思っっている。

ま、そうだよな、と皆頷く。

「で、作曲は？」

任せた、とばかりにミナ。

すっかり脇でちびちびやってるケンタも同様っぽい。

「案はあるんだよな」

と言えば全員の視線がこっちに向く。

「一曲はストレートなロック、てかパンクナンバー作ってくる」

んじゃ、話し合い終わりって感じで皆がもう一度ジョッキを合わせた。

ミナはもう二杯目。

何か前回の事もあって正直その飲みっぷりに不安がある。

*

まあ、案の定だ。

何故だか皆にリーダー、リーダー囃し立てられて、千鳥足のミナを押し付けられた。

リーダーの役を嬉々として受け入れた酔っ払いがいた気がする。

てか俺だ。

酔いつて怖い！

「きぼちわるい」

「もうちよつとだ、もうちよいで俺ん家だ」

ミナに肩を貸して夜道を歩く。

なかなかの小柄な彼女なので中腰が辛い。

ついでに右手に持ったサンダーバード重い。

どうにか家に着いた頃にはミナの酔いも多少引いていた。

そして、今に至る。

サンダーバード・ヒルズ 3

「そーいえばガミ君で彼女居ないの？」

布団を奪われて仕様がなくソファに転がった俺に向かってさらっと問題発言してくれるミナ。

「……今は、な」

大学出て、それっきりのアイツは今は何をしているのだろうか。ミナを見やれば、布団の近くに落ちてた本を拾って読んでいる。赤く火照った肌、はだけられたワイシャツから覗く鎖骨。

目を逸らす。

「お前も明日仕事なんだろ、いいのか帰んなくて」

ん？と鳴く謎生物。

「帰ってほしい？」

それがからかうような口調だったら、一も二も無く頷いて居ただろう。

けれど、その言葉には隠しきれない寂しげな、儂い響きがあった。何となく捨て猫を思わせる彼女を外に放り出す気にはならなかった。

一つ溜め息。

「さっさと寝るぞ」

そう言って電気を消す。

「ありがとう」

その言葉を聞きながらソファに体を横たえる。ささて、眠れるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3782m/>

アンダードッグ・ロッカーズ

2010年10月17日18時55分発行